

IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



吉田茂樹著書

特集 コンピュータネットワーク分野 吉田茂樹

→本を書くということ / 技術書というもの / コンピュータを理解する

- 私のイチオシ
- 館長コラム
- お知らせ

特集 コンピュータネットワーク分野 吉田茂樹 (よしだ しげき)

この特集では、IAMAS の教員に、自著・人生を変えた本・お薦めの本などを紹介してもらいます。

第4回は、学長の吉田茂樹教授です。



→本を書くということ

私は工学系の人間なので、これまでに書いた本は工学系のものがほとんどです。その中で自分が最初に書いた本は、1994年にオーム社から出版された『インターネット漂流記』(共著)です。当時は日本にもすでにインターネットプロバイダは存在してはいましたが、インターネットはまだ知る人ぞ知るとい状況でした。それでも、インターネットへの興味がある人が多かったのでしょうか、出版後何度も増刷されてその手の本としてはある程度の数が出ました。

当時は本以外にも技術系の雑誌の原稿もいくつも書いていました。それまでは「本や雑誌の原稿を書く人」というのはテレビのタレントと同じで、自分とは違う世界にいる人だと思っていましたが、自分が本や雑誌の原稿を書くようになってからは意外と身近なところにある世界なのだと思うようになりました。

自分で原稿を書くようになったことで、人に教えるためには自分がちゃんと理解していないといけないということを感じられて、改めていろいろなことを調べ直し理解しなおすよい機会にもなりました。一方で、一度出版されてしまうと訂正することが難しく、出版後に「あ、しまった」と思うこともあり、本を出すということの難しさも感じました。今なら電子出版もありますし、Webと連携するなりして訂正も効くのですが...

→技術書というもの

自分が書いた本は「技術書」であって、比較的固い内容が多いのですが、一方で特定の機器やソフトウェア等には依存しないものがほとんどです。でも、最近の「技術書」は具体的な機種やソフトウェア等を前提にした「マニュアル本」が多く、そのために時代の変化と共に比較的早くそれらの内容が「使えない」ものになっていっているように感じます。

次々と登場する技術について学ぶことは必要でしょうが、できれば技術の本質もしくは基本的な考え方等について理解をして、具体的な機器やソフトウェアについては、それを応用して対応できるようになると、得た知識や経験が長持ちするのだらうと思います。そのためには、その本質や基本について書かれた「バイブル本」がきちんと存在することが重要だと考えています。

私は社会人になった時に「C言語」というプログラミング言語に出会ったのですが、その勉強のために『プログラミング言語C』(カーニハン、リッチー著。石田晴久訳。共立出版)というバイブル本を買い、ひたすら勉強しました。そこで学んだことは30年たった今でも基礎知識として役立っています。



オーム社/1994年

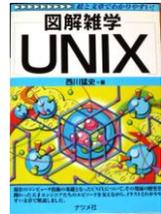


共立出版/1981年

→コンピュータを理解する

授業でコンピュータの仕組みを教える機会が何度もあり、そのために教科書として使えそうな本を探したのですが、IAMASの学生にとっては専門的すぎたり逆に簡単すぎたりして、なかなか適切な本が見つかりませんでした。

そんな中で出会った『図解雑学 UNIX』（西川猛史著。ナツメ社）という本は、一見「お手軽に理解するための軽い本」のように見えますが、内容的にはコンピュータの仕組みから、歴史、OSの変遷やパソコン、インターネットにまで及び、コンピュータを網羅的に理解するには非常によい本だと思っています。ただ、すでに絶版のようで、入手するには古本屋さんやオークション等で探すしかないのが残念です。でも、できればなんとか入手して、何度も読んでみることをお勧めします。



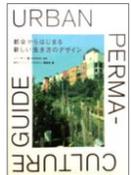
ナツメ社/2002年

私のイチオシ

本学2年生のみなさんにお薦めの本を紹介してもらいました。図書館で展示しますので、ぜひご利用ください。
(似顔絵：丹羽彩乃さん)

ソーヤー海/監修『URBAN PERMACULTURE GUIDE 都会からはじまる新しい生き方のデザイン』

都会において持続可能な生き方ってあるのだろうか？そんな疑問に答えてくれるのが、この本である。都市には都市のリソースが眠っている。そして今後都会で生きるためには、リソース同士の関係性をうまく考えていくことが必要になってきている。これからどう生きていくのかを考えるにあたって一つの手段として、アーバンパーマカルチャーという考えは、アリなのではないか。(エムエム・ブックス/2015年)



後藤良太さん

木村宗慎『一日一菓』

茶人・木村宗慎が1年間365日、毎日ひとつずつ和菓子を紹介していく、とても美しい本です。しつらえられた和菓子と古器が、春は桜、夏は新緑、秋は紅葉、冬は雪景色と、1年間にめぐる季節を表現しています。和菓子にまつわる解説やコラムもあり、たまたま開いたページを眺めたり、見つけた和菓子を買に行ったり、きれいで、ぱっと見るだけで心が踊る素敵な一冊です。(新潮社/2014年)



清水都花さん

上前淳一郎「読むクスリ シリーズ」

アイデア豊かな人たちが、企業で新製品の開発や問題解決などを行ったエピソードが短くまとめられているコラム集。発明家になりたかった小学生時代に、いつかここに載りたいと思いつながら読んでいたのを思い出す。クスリにもなりクスリと笑える話も詰まった本なので研究・制作の合間にどうぞ。(文芸春秋/1984-2005年)



宮野有史さん

館長コラム その4 書物のいじましさ

通学や通勤の電車のなかで書物を広げて読んでいる人は少ない。多くの乗客がスマホを、まるでお位牌を拝むかのような前かがみの姿勢で睨んでいる。スマホ利用者のこれまた多くがLINEでそこにはいない誰かと通信していたり、ゲームでどこにもいない誰かと闘ったりしている。ごくわずかにKindleや青空文庫などの電子書籍リーダーを用いて「読書」をしている人がいると、なんだかうれしくなって、「書物に代わってお礼申し上げます」と最敬礼をしたくもなる。だが、電子書籍はもちろん「物質」としての書物とは何もかもちがっている。雨の降る日の車中で文庫本を広げたときにすべての頁が波打ってしまったものを手にするときのなんとも言えない失望や、大事な頁に付箋を貼るならまだしも、下端を三角形に折ったり、あるいは映画の半券やコンビニのレシートやクリーニング屋の引取票などがはさまっているような、どこまでが書物なのかかわからない呆然とした感覚といったものを味わうことができないのだ。電子書籍は確実に文字情報のみによって脳内に書物の宇宙を流し込んでくれる。そこには、物質としての書物もつ、読書とはおよそ無関係な、いじましさが漂わないのである。



電子書籍リーダー

お知らせ

→My Private Library わたしの本棚（展示）

2016年5月25日から、図書館の一角に、スタッフや学生のプライベートな本棚を再現しています。本棚に並べるものは、本やDVDのほか、グッズや制作した作品などなんでもアリ。展示は1～2週間ずつの交代制で、初めに館長と司書2名のスタッフ、現在は学生の本棚になっています。本棚はその人の興味や性格が表れるので、展示するのは少し恥ずかしいですが、見る人にとってはとても面白いようです。展示をご希望の方はぜひご一報ください。



→「図書館長による大人のためのブックトーク」を全4回開催

小林昌廣館長による「今週の一冊」拡大版を岐阜県図書館で開催しています。昨年度大変好評だったため、今年度は全4回で行うことになりました。6月19日に開催した第1回では、近松門左衛門『曽根崎心中』、山崎豊子『白い巨塔』、プレント・バーリン『基本の色彩語』の3冊を、一部スライドを交えて紹介しました。今後は、7月16日、8月13日、9月10日に行う予定です。



わたしの本棚（展示）

→資料展示 2016.4～6

資料展示として、新入生におすすめ！貸出ベスト33資料展示（4月）、「ちょっとヘンなモノのつくり方の本」展示（5月～6月）を開催しました。「ちょっとヘン...」展示は、モノづくりに興味がある学生が多いからか今までになく貸出が多く好評でした。また、現代美学特論」講師著作展示（6月～）、「憲法と、「今」を生き抜く本」展示（6月～）など大学の講義にあわせた展示も行いました。

→オープンハウス 2016.7.30,31

図書館では、IAMASプロジェクト関連資料展示、七化菜展や古本市を行います。また、IAMAS図書館プロジェクト主催で「図書館長が選ぶ今週の一冊・番外篇」と「IAMASピブリオバトル」を開催予定です。興味のある方はぜひご参加ください。